



千葉県の最新医療情報ご紹介

直腸がんの肛門温存手術「括約筋間切除術」

「自分の肛門を残したい！」その願いをかなえる最新手術法。
下部直腸がんでも肛門の温存が可能に。

帝京大学ちば総合医療センター外科学講座教授 医学博士 幸田 圭史 医師

の排泄をコントロールできます。しかし括約筋がない人工肛門ではいわゆる垂れ流し状態となってしまうため、便の受け皿となる専用の袋を常に着けておいて排便の管理をしなければなりません。

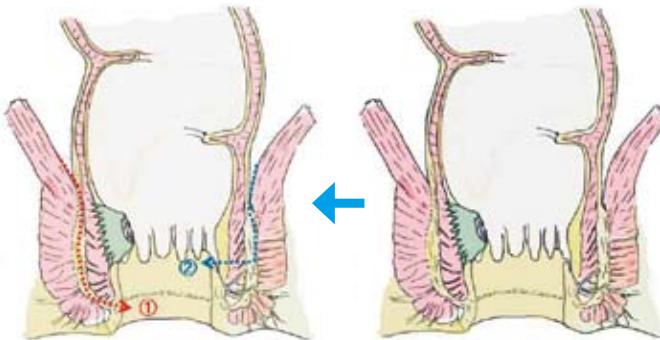
排泄の問題というのは非常にデリケートで深刻。肛

門を失い人工肛門に変えるというのは誰にとっても大変抵抗のことがあり、その後の人生に関わる大問題です。ですが現在、肛門温存術は飛躍的な進歩を遂げています。中でも画期的といえるのが、2000年あたりから増え始めた「括約筋間切除術(ISR)」です。

がんはしつかり退治したい。でも体の機能はなるべく残したい。それはがんの手術を受ける患者さんたち共通の願いでしょう。その切実な思いに応える最新の肛門温存手術について、帝京大学ちば総合医療センターの幸田先生に伺いました。

温存か人工肛門か。よく理解して選択を。

大腸がんの中でも、がんが肛門に近いところにでききた下部直腸がんの場合、がんの腫瘍を肛門ごと切除しなければならないことがあります。そうなった場合は、肛門のかわりに便の排泄口の役目をする人工の肛門(ストーマ)をお腹の下の方に造ることになります。本来の肛門なら、肛門をギュッとしめて洩れを防ぐ「括約筋」という筋肉があるので、自分の意志で便やガス



このような症例にたいして①ないし②のような切離線で直腸癌を切除し、肛門を温存する。

括約筋間切除術は従来、永久人工肛門になっていた、肛門管にかかる低い位置の腫瘍が対象となる。

ただし、肛門括約筋の一部は切除するため、手術前と同じようには排便をコントロールできなくなるという術後後遺症の問題はあります。そのため、肛門を残すことが必ずしもベストとは限らず、患者さんの病状やライフスタイルによっては人工肛門を選択した方がより良い結果につながることも。ですから、肛門を温存した場合と人工肛門にした場合のメリットデメリットを正しく理解し、しっかりと納得した上で自分にうつてのより良い手術法を選択できるよう、主治医と充分話し合うことがとても重要です。



腰椎椎間板ヘルニアの内視鏡下手術

小さな傷で、痛みが激減！より体にやさしく進化した腰椎椎間板ヘルニア手術。

労働者健康福祉機構千葉労災病院副院長／労働者脊椎・腰痛センターセンター長 山縣正庸医師

詳しいことは知らない人でも、「そうとう痛いらしい」ということだけは有名な「椎間板ヘルニア」。激しい腰痛だけでなく、足の痛みやしびれなども引き起こし、多くの人を悩ませている病気です。その治療の一つとして、体へのダメージの少なさから注目を集めている最先端のハイテク手術について、千葉労災病院・脊椎腰痛センターの山縣先生にお話を伺いました。

ダメージが少ない分、痛みが少なく回復も早い

「腰椎椎間板ヘルニア」と診断されても、その8～9割の患者さんは、安静や鎮痛薬投与、各種ブロック療法などによって改善できます。ところが治療を続けても痛みが取れなかったり、排尿・排便障害まで起るような場合には、椎間板ヘルニアを切除する手術が必要となります。

最も一般的な手術は「ラブ法」といつて、背中側から病巣まで皮膚や筋肉を切開して椎間板ヘルニアを切除する方法です。しかし私達はより体へのダメージが少ない治療を目指し、内視鏡下手術を取り入れています。



腰椎の後方に内視鏡を挿入し、手術部位をハイビジョンカメラで写し出し、これを2台のモニター画面を見ながら手術を行います。

「内視鏡下（ないしきようか）手術」とは、手術器具を体の中の病巣まで挿入し、内視鏡が映し出すヘルニアをモニター画面で見ながら切除する手術法です。

日本整形外科学会では、脊椎内視鏡下手術・技術認定医を定めています。認定医については、日本整形外科学会ホームページで検索できます。
<http://www.joa.or.jp/jp/index.asp>

切開するのは手術器具の挿入に必要な2cm程度。皮膚や筋肉を大がかりに切り開いた従来の手術に比べ、皮膚や筋肉の損傷がずっと少なく済みますから、出血や炎症も格段に軽減でき傷口も目立ちません。特に変わったのは患者さんの術後の痛み具合で、以前は痛みから術後1週間寝たきりの患者さんもいたのに對

ては、内視鏡下手術では術後1度も鎮痛剤を使用しないことが多い、ほとんどの患者さんが手術の翌日には歩けるようになります。

入院日数も、従来は約3週間だったのに対し、内視鏡下手術の場合は術後4日～1週間ほどで退院。現在では保険も適応され、痛みが少なく社会復帰も早い手術として、患者さんたちから大変喜ばれています。

ただし、この手術には熟練した医師の高度な技術と豊富な経験が必要不可欠であるため、施術できる医師と病院は多いとはいえません。ですが現在、国レベルで内視鏡外科手術の水準を上げるための努力が始まっています。医療機器の進化と医師の技量の進歩と合わせ、この治療法は今後ますます発展していくと思います。

